

親の養育態度が性格形成に与える影響とは ～中学生の対友人行動に現れる傾向～

05jn1033 武藤恵美

(担当教員：久世淳子)

1. はじめに

人の性格・パーソナリティは、過去の体験やトラウマ、生活環境等に大きく影響をうけている。中でも幼い時から1番近くで関わってきた両親との関係は、人の性格形成に最も大きく影響しているのではないかと思います。調べることにした。

これまでも親の養育態度が子どものパーソナリティに与える影響については数々の研究・調査がされている。Baumrind (1967) は、統制(子どもの意思とは関係なく親が子どもにとって良いと思う行動を決定し、それを強制する行動)と応答性(子どもの意図・欲求に気付き、愛情のある言語や身体的表現を用いて、子どもの意図をできる限り充足させようとする行動)の2つを軸にし、養育態度を3つに分類した(表1)。

表1 養育態度の分類

	統制	応答性
権威的態度	高	高
権威主義的態度	高	低
許容的態度	低	高

この分類を用いた戸田(1998)の母親の養育スタイルと子どもの攻撃的行動についての研究によると、権威的態度の親を持つ子どもは、喧嘩などを避けようとする傾向が見られ自主性も見られる。また、権威主義的態度の親を持つ子どもは、主張性が乏しく攻撃性も低い従順な子どもであるということが示された。しかし、同じくBaumrindの分類を用いて同様の研究を行なった中道・中澤(2003)では、権威主義的態度の親を持つ子どもは、他者からの働きかけに対して攻撃的な反応を示す傾向が強いと報告している。権威主義的態度をとる親は、こどもからの働きかけに対してあまり応答的に行動せず、一方的に統制する行動を行なうため、子どもは他者からの自分への働きかけに対する応答的な行動モデルを獲得することができなかつたのではないかと考えられる。

戸田(1990)は、「愛情-無関心」、「統制-非統制」、「服従」の3因子からなる質問紙を作成し、

親の養育態度とInternal Working Modelsとの関連について報告している。この研究では統制とambivalent特性との間に正の相関が見られ、統制的な養育態度は、子どもの他者に対する安心感や信頼感の形成を阻害する傾向があることを示している。また、secure特性は愛情と正の相関を示し、戸田(1998)と類似の結果になっている。

今回の研究では、親の養育態度が性格形成にどのような影響を与えているかを、「友人に対する行動」という面からみていきたいと思う。

2. 方法

調査対象者：半田市の中学校3校の1年生647名(男子344名、女子302名、未記入1名)を対象に調査を行なった。A校267名、B校219名、C校161名で、男女比は3校ともほぼ同じであった。養育者(自分のしつけを主にしてくれている人)については、父79名、母504名、祖父2名、祖母20名、その他5名であった。その他の内訳は学校の先生や兄弟であったので、分析からは除外した。最終的に613名(男子320名、女子293名)を分析対象とした。

調査項目：性別と養育者以外のものは以下の2つである。

①親の養育態度

戸田(1990)により作成された質問紙を使用した。今回はこの質問項目のうち、「愛情」10項目、「統制」7項目、「服従」3項目を引用した、計20項目について5件法で評定を求めた。

②対友人行動

吉村(2007)が中学生の適応感を測るために作成した質問紙を使用した。自己表現・主張(自発的に他者と関わり、自己の意見を明確に主張する行動)、利己的表現(自己表現が積極的であったとしても、他人のことを考えず自己ばかりを表現する行動)、小集団閉鎖性(特定の友人による小集団内で孤立しないよう気遣いながらつきあい、その関係維持を優先するために小集団外の仲間に閉鎖的

になる行動)の3因子、24項目からなっている。今回はこの質問項目のうち、各因子から3項目ずつ、計9項目を抜粋し、5件法で評定を求めた。

3. 仮説

先行研究の結果を基に3つの仮説をたてた。

仮説1:「愛情」項目の得点が高い親を持つ子どもは「自己表現・主張」が高い。

仮説2:「統制」項目の得点が高い親を持つ子どもは「利己的表現」が高い。

仮説3:「服従」項目の得点が高い親を持つ子どもは「利己的表現」が高い。

4. 結果

結果はSPSS 15.0J for Windows 統計パッケージを使って分析した。

親の養育態度20項目について因子分析(主因子法でVarimax回転)をしたところ、先行研究と同様の3因子が確認された。対友人行動9項目についても同様に因子分析をしたところ、こちらも先行研究と同様の3因子が確認された。因子ごとに得点を計算したものが表2である。

表2 各因子の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
愛情	34.7	8.36
統制	17.5	6.12
服従	6.6	2.24
自己表現・主張	7.8	3.22
利己的表現	7.7	2.58
小集団閉鎖性	10.6	2.46

親の養育態度3因子と対友人行動3因子間で相関を求めたところ、「愛情」と「自己表現・主張」、「統制」と「利己的表現」、「服従」と「利己的表現」、「服従」と「小集団閉鎖性」に、それぞれ正の相関がみられた(表3)。

表3 親の養育態度と対友人行動の相関

		自己表現・主張	利己的表現	小集団閉鎖性
愛情	相関係数	0.175**	-0.035	0.019
	N	588	589	586
統制	相関係数	0.035	0.248**	0.093
	N	588	588	585
服従	相関係数	0.036	0.168**	0.142**
	N	594	594	591

**相関係数は1%水準で有意(両側)

5 考察

仮説1について:仮説通り「愛情」と「自己表現・主張」には正の相関がみられた。子どもを受容し温かい態度で接することで、子どもの安心感や誇大自己が適度に満たされ、自発的に他者と関わり、自己の意見を明確に主張することができると考えられる。

仮説2について:「統制」と「利己的表現」には正の相関がみられた。従って中道・中澤同様、統制的な養育態度では、子どもが他者からの働きかけに対する応答的な行動モデルを獲得することができず、利己的表現が強くなってしまいう傾向があると考えられる。

仮説3について:仮説通り「服従」と「利己的表現」には正の相関がみられた。子どもに対して服従的な養育態度の親を持つ子どもは、自己表現が積極的であったとしても、他人のことを考えず自己ばかりを表現する傾向があると考えられる。また、「小集団閉鎖性」とも正の相関がみられたことから、服従的な養育態度で育てられた子どもは、クラスなどの大きな集団よりも仲良しグループなどの小さな集団を好む傾向があることがわかった。これは、小さな集団の方が利己的な表現や主張がしやすいからではないかと推測する。

6. 引用文献

- ・中村晃・松並知子 2001 自己愛と親の養育態度.日本教育心理学会総会発表論文集, No.43 P.341.
- ・中道圭人・中澤潤 2003 父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連.千葉大学教育学部研究紀要, Vol.51, P.173-179.
- ・戸田須恵子 1998 母親の養育スタイルと子どもの攻撃的行動に関する研究.北海道教育大学紀要, (第1部C), 第48巻, 第2号
- ・戸田弘二 1990 女子青年における親の養育態度の認知と Internal Working Models との関連.北海道教育大学紀要, (第1部C), 第41巻, 第1号.
- ・吉村斉 2007 中学生の適応感を規定する要因としての対人行動とその性差.心理学研究, 第78巻, 第3号, P.290-296.